
私の幼馴染みは・・・

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の幼馴染みは・・・

【Nコード】

N4310F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

一話完結型です。名前は一緒ですが、性格などその他は変わります。恋愛っばくて恋愛じゃないです。ラブラブは、あまりありません。

1 私の幼馴染みは（腹黒バージョン）（前書き）

女の子に対しての腹黒ではありません。

1 私の幼馴染みは（腹黒バージョン）

私の名前は、サラといいます。私は生まれてこのかた恋人はいませんでした。理由は分りませんが・・・。

「何してんだ？サラ・・・」

彼は幼馴染みの氷雨くん。読み方はヒサメです。

「また、呼ばれた場所に行ったら誰もいなかったの」

「からかわれたんじゃないの？」

私は、そうかなあと呟いた。

その時の氷雨の妖しい笑みに気付かなかった。

「いい加減諦めろって」

「ん」

唸る私に笑った氷雨。頭をポンと叩かれた。優しく叩いたので痛くなかった。

「あ、俺行くとこあつから」

思い出したように言った氷雨に、手を振った。

場所は変わり、校舎裏。氷雨は、ズボンに手を入れて歩いている。

「おいっ」

「んあ？」

氷雨は、機嫌が悪そうに男に話し掛けた。

「アンタが・・・サラに告白すんのか？」

「だったらなんだよ？」

男の返答にニヤツと笑った氷雨。

「アンタみたいな不細工が、サラに近付けると思ってるわけ？」

「なんだと!？」

氷雨の発言に、当たり前のようにキレた男。

「アンタさあ、どっかの財閥の息子なわけ？」

「ふ、普通のリーマン家庭だ」

「そんなんでサラと付き合うなんてバカじゃないの？頭が可哀相だね。もしかしてヅラだったり？」

氷雨の言葉に顔を真っ赤にして怒った男。

「これは地毛だ!!少し長いが!!」

「んなことはどーでも良い。アンタごときがサラに触れようなんてふざけ過ぎ。鏡を見たら？あゝ鏡が家に無いんだ。可哀相だね。でも、アンタなら学校のトイレのほうがお似合いなんだよ」

男に口を挟む余地を与えない氷雨。マシンガントーク故に言い返せない。

「第一サラは俺のなんだよ。一々、告白してきやがって潰す俺の身にでもなってみろよ」

「ま、まさか・・・サラさんに告白した奴等みんな、青ざめて二度とサラさんに近付かなかった理由って・・・」

そうなのだ。サラに告白してくる奴等を、氷雨が全員排除してるのだ。

氷雨の怖さに、みんな近付けないのだ。

「そうだよ。俺が元凶だ・・・何か文句でもあるのか？」

「な、無いです!!」

「なら、さっさと帰れ。サラに二度と近付くな」

男は、泣きながら逃げ去った。

フツと笑って、来た道に戻る氷雨だった。

「あれ？またいないや・・・」

約束の時間になったら、校舎裏に・・・って書いてたのになあ。
やっぱり、からかわれるのかなあ？

私の幼馴染みは腹黒決定！！

1 私の幼馴染みは（腹黒バージョン）（後書き）

追記ですが、サラは氷雨を恋愛感情としては見てません。氷雨の片
思いです。

2 私の幼馴染みは・・・（芸能人バージョン）

サラです。実は、久し振りに幼馴染みの氷雨が帰って来ました。なぜ久し振りなのかというと、氷雨は芸能人なんです。歌から俳優までこなす、いま話題の人なんです。

「何言ってるの？サラちゃん」

「止めて！らしくない！！」

「悪い悪い・・・どーしたんだよ？サラ」

鳥肌が立ちました。サラちゃんなんて・・・。

「それよりも！前のテレビで好きな人がいるって言ったよね！！」

そうなんです。対話型バラエティで氷雨は、こんなことを言いました。

『いま話題の氷雨さん。ファンからの質問コーナーです』

『お手柔らかにお願いします』

インタビューのお姉さんに、いつもと違う様子で話す氷雨。
テレビでは、キャラを作ってるからね。

『第一問、氷雨さんの好きな食べ物は何？』

『普通の質問ですね。ブログでもありますが、和食が好きです』

苦笑い気味に話した氷雨。

昔から、和食以外を食べないんだよね。

『第二問、癖ってありますか？』

『ありますよ。顎に手を添えて考えるポーズをしています』

小さい頃からそうだった。ファンの間では、氷雨ポーズと呼ばれてるらしい。他にもしてる人だっているのに……。

『第三問、これはファンの皆さんが気になってますね。好きな女性のタイプは何？』

『……えっと、大和撫子な方ですね』

初めて戸惑った氷雨。

大和撫子って、私と逆じゃん、と何故かショックを受けた。

『最後です。・・・好きな方はいますか？』

インタビュールのお姉さんは、赤くなりながら聞いた。
私は、ドキドキしている。

『いますよ・・・』

ボソツと言った声に身を乗り出したインタビュールのお姉さん。
私は、ファンの皆さんと言っただろうな、と思っただ。

『近過ぎて気付かなかったけど、こうして離れてから気付いたんだ』

まただ、ドクンドクンと高鳴る胸。

緊張してる自分に焦りを覚える。

番組は、そこで終わった。

虚しさだけが残った。自己嫌悪だった。

誰が好きなんだろう、と自分に何度も問詰める。

「サラ？」

ずっと黙ってた私に心配顔で見る氷雨。

「あ．．．なに？」

「好きな人だっけ？」

「聞きたく——」

否定の言葉を言う前に止めることになった。
理由は、抱き締められてるからだ。

「え．．．」

「サラ．．．好きだよ」

体中の熱が顔に集まってく。

嘘だ．．．夢だ．．．と、更に否定してる自分がいる。

それに気付いたのか、頭を優しく撫でる氷雨。

氷雨の温かい手に、体の力が抜けて、氷雨に全体重をかけていた。

「ひ．．．さ．．．め」

「好きだよ．．．サラ」

ドラマのような甘い声に甘いセリフ。

この人は、何度私をときめかせれば気が済むんだろう？
ありがとう氷雨。最後の言葉は聞こえたかな？

「——私も愛してる——」

私の幼馴染みは芸能人決定！！

2 私の幼馴染みは・・・（芸能人バージョン）（後書き）

前のよらラブラブだった。書いてて恥かしくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310f/>

私の幼馴染みは・・・

2010年10月10日04時52分発行